

「イスラエルは神に棄てられた」という解釈は誤り

聖書の預言を理解する上で、欠かせない要素が幾つかありますが、その1つに、いわゆる「置換神学」と呼ばれているものがあります。今回のレポートは、これの是非について取り上げます。

「置換神学」とは ー (以下は wikipedia からの抜粋です)

《新約聖書解釈の一つで、選民としてのユダヤ人の使命が終わり、新しいイスラエルが教会になったとする説である。

その根拠とされる聖句は、ガラテヤ 3:6-9、3:29、ローマ 2:28、29、4:13、マタイ 21:43 である。聖書の語句で「イスラエル」と出てくる箇所を「ユダヤ人」と見なさずに霊的にのみ解釈する(キリスト教、教会を「真のイスラエル」とする)。

12 世紀にクレルヴォーのベルナルドゥスは、ヨハネによる福音書 8:44 を根拠として、ユダヤ人の父は悪魔であり、ユダヤ人は悪魔の子であるとした。

16 世紀のローマ教皇パウルス 4 世の大勅書 [Cum nimis absurdum] は、イエス・キリストを殺したユダヤ人は、永遠に神に非難される奴隷だとしている。ローマ教皇インノケンティウス 3 世は、イエス・キリストを殺し奴隷となったユダヤ人が永久に地上をさまようとした。》

まず、この神学の「根拠」とされている聖句の考察します。

まず、ユダヤ人全てが「悪魔の子」とであるという主張について。

「あなたたちは、悪魔である父から出た者であって、その父の欲望を満たしたいと思っている。悪魔は最初から人殺しであって、真理をよりどころとしていない。彼の内には真理がないからだ。悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている。自分が偽り者であり、その父だからである。」(ヨハネ 8:44)

「あなたたち」とは、「ファリサイ派(パリサイ人)」であり、彼らに対して語られた言葉ですが、この言葉が「ユダヤ人全体」を指していないことは明白です。

そして彼らが「悪魔の子」とであると言うのは、その特質が似ているという比喻であり、それは、「真理をよりどころとしていない。彼の内には真理がない」というものであり、未来永劫に、ユダヤ人全てが「悪魔の子」とされたというのは、全く根拠のない飛躍であり、文字通りには「アブラハムの子孫」ではあっても、彼らには、そう主張する資格がないという意味のことを示そうとしておられることは、ある程度の文章読解力があれば中学生でも分かるでしょう。

さらに、根拠とされる、ガラテヤ、ローマ、マタイの聖句についても考慮しましょう。

「アブラハムは神を信じた。それは彼の義と認められた」と言われているとおりです。

だから、信仰によって生きる人々こそ、アブラハムの子であるとわきまえなさい。

聖書は、神が異邦人を信仰によって義となさることを見越して、「あなたのゆえに異邦人は皆祝福される」という福音をアブラハムに予告しました。

それで、信仰によって生きる人々は、信仰の人アブラハムと共に祝福されています。あなたがたは、もしキリストのものだとするなら、とりもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束による相続人です。」(ガラテヤ 3：6-9；29)

まず、全体に言えることですが、全ユダヤ人が、キリストを殺したわけではないので、全てのユダヤ人が、同罪ではないの確かです。

これによって変化したのは、生来のユダヤ人だけから、「王、祭司」を選ぶと言う取り決めが変化し、「異邦人」にもその対象が広げられたと言うことにほかなりません。

この記述によって、文字通りの、アブラハムの肉の子孫であるユダヤ人が、「アブラハムの子」であることを完全否定することはできないでしょう。

「信仰によって生きる人々こそ、アブラハムの子である」というのは、神がもくろまれた（望まれた）本来の主要な特質が、「信仰」であって、そのような人こそ「アブラハムの子」に相応しい、ということであり、生来の異邦人が「アブラハムの子」と呼ばれる「根拠」を示すために述べられているのであって、これにより、成されるのは、「置換」ではなく「包含」であると捉えられるべきでしょう。

「彼らは神を認めようとしなかったので、神は彼らが無価値な思いに渡され、そのため、彼らはしてはならないことをするようになりました。 あらゆる不義、悪、むさぼり、悪意に満ち、ねたみ、殺意、不和、欺き、邪念にあふれ、陰口を言い、彼らののどは開いた墓のようであり、彼らは舌で人を欺き、その唇には蝮の毒がある。」(ローマ 1：28, 29；3；13)

これらの記述は、ユダ人の悪徳を糾弾することばですが、彼らが、アブラハムを通して結ばれている神との契約関係を無効にすると断言する根拠は皆無です。

「だから、言うておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる。」(マタイ 21:43)

ここに出て来る「あなたたち」は文脈をみれば分かりますが、「祭司長や民の長老たち」のこ

とであり、全ユダヤ人のことではありません。

いずれの「根拠」とされる聖句も、神との契約関係にあるものがユダヤ人からクリスチャン（教会）に置換されたという根拠はなく、完全に誤った神学であることは、多くの論を待つ必要もなく明白です。

さて、では、聖書そのものは、神と生来のユダヤ人との関係については、どのように述べられているのでしょうか。

（この件に関する詳細は、すでに、レポート「09 「14万4千人」を改めて検証する」で、詳しく述べていますが、ここで簡単に、触れておきたいと思います。

しかし、解説などは不要で、誰でも、ローマ 11 章を読みさえすれば、分かることであり、殊更に何らかの論理を組み立てて立証する必要もない、それほどに明瞭明確な記述です。

「では、尋ねよう。神は御自分の民を退けられたのであろうか。決してそうではない。」

神は、前もって知っておられた御自分の民を退けたりなさいませんでした。・・・同じように、現に今も、恵みによって選ばれた者が残っています。」

「では、尋ねよう。ユダヤ人がつまずいたとは、倒れてしまったということなのか。決してそうではない。かえって、彼らの罪によって異邦人に救いがもたらされる結果になりましたが、それは、彼らにねたみを起こさせるためだったのです。」

彼らも、不信仰にとどまらないならば、接ぎ木されるでしょう。神は、彼らを再び接ぎ木することがおできになるのです。

「もしあなた（異邦人クリスチャ人）が、もともと野生であるオリーブの木から切り取られ、元の性質に反して、栽培されているオリーブの木に接ぎ木されたとすれば、まして、元からこのオリーブの木に付いていた枝（生来のユダヤ人）は、どれほどたやすく元の木に接ぎ木されることでしょう。」

「福音について言えば、イスラエル人は、あなたがたのために神に敵対していますが、神の選びについて言えば、先祖たちのお陰で神に愛されています。

「神の賜物と招きとは取り消されないものなのです。」（ローマ 11 章抜粋）

誰が読んでも明白ですが、「折り取られ、躓き、倒れたユダヤ」という表現は、決して「靈的イスラエル」のことを述べているわけではありません。

パウロ自身、「わたしもイスラエル人で、アブラハムの子孫であり、ベニヤミン族の者です。」と付け加えることによって、この論議が、文字通りの肉のユダヤ人に関するものであることを

明確にしようとする配慮がうかがえます。

後半の部分は少し分かりづらいので、簡単にコメントを加えたいと思いますが、28節の「福音について言えば、敵対し、選びについて言えば、愛されている」とはどういうことでしょうか。通常理解、感覚で言えば、福音とは、キリストの贖い故に罪が放免されて、神の召しに預かることができるという音信でしょう。

パウロは、不可分のものに思える「福音」と「選び」を分けて論じています。

ユダヤ人の、福音に関連した立場というのは、彼らは拒み、あなた方（異邦人）は福音を受け入れたために、神に対して敵対関係にあるが、しかし、神の選びについては、先祖の故に愛されている（選ばれている続けている）。ということです。

少なくともここから分かるのは、「福音」と「選び」は別問題だということです。

（クリスチャンになった人を別にしてほとんどの）ユダヤ人の（オリーブの木から折り取られた）罪は、キリストを殺したことにあると言うより、福音を退けたことにあると言うことです。しかし、「神の選び」というものは、それによって潰えるような種類のものではないということです。

ここに、神の選び、愛着というものの「モノスゴサ」を感じます。

確かに、この点は正に「ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。」とパウロが締めくくっているように、心変わりすることもある人間には、理解を超越した、神のセンスとはこういうものなのでしょう。

「神の賜物も招待も、（一旦与えられた以上は永遠に）取り消されないからである。」（11:29 塚本訳）

「なぜならば、神の恵みの賜物と召しとは、破棄されることがないものだからである」。（岩波翻訳委員会訳）

さて、最後にこのことに関連した神の計画について述べておきたいと思います。

それは、この節の少し前の25-27節に関するものです。

「一部のイスラエル人がかたくなになつたのは、異邦人全体が救いに達するまでであり、こうして全イスラエルが救われるということです。次のように書いてあるとおりです。「救う方がシオンから来て、ヤコフから不信心を遠ざける。これこそ、わたしが、彼らの罪を取り

除くときに、彼らと結ぶわたしの契約である。」

まずここで、異邦人に対して開かれた招待には「締め切り」があるということです。

異邦人からなるクリスチャンのための席数が決まっており、それが満たされた時に、その募集は終わり、再び、ユダヤ人を対象にした、「再接ぎ木キャンペーン」が大々的に行われることになっているということです。

そのようにして「全イスラエルが救われる」ことになっています。

「〔その奥義とは、〕 頑迷さが部分的にイスラエル人に生じたが、〔しかしそれは〕 異邦人たちの〔救いの〕 満ちる時がやって来るまでのことであって、・・・」(岩波翻訳委員会訳)

「一部のイスラエル人が頑なになって(キリストを信ぜずに)いるのは、異教人が(信仰に)入って定数に満ちるまでであり、・・・」(塚本訳)

そして、その方法は、ユダヤ人から「不信心」を遠ざけるといふものであり、そして明確な「契約」が成されることとなります。

かつて、ほとんどのユダヤ人は「新しい契約」に入り損ねましたが、異邦人との契約締結可能期間が過ぎると、もう一度、ユダヤ人との契約のためのチャンスが設けられるということです。

(しかしこの契約は、いわゆる「王国」に召されるクリスチャンの契約とは別の種類のもののようなようです。)

ローマ 11 章で述べられていた、「イスラエルの回復」については、パウロが念頭においていたであろうと思われる預言は、例えば次の聖句です。

「主は贖う者として、シオンに来られる。ヤコブのうちの罪を悔いる者のもとに来ると主は言われる。

これは、わたしが彼らと結ぶ契約であると主は言われる。あなたの上にあるわたしの霊、あなたの口においたわたしの言葉はあなたの口からも、あなたの子孫の口からも、あなたの子孫の子孫の口からも今も、そしてとこしえに離れることはない、と主は言われる。」(イザヤ 59:20, 21)

「それゆえ、ヤコブの咎はこのようにして贖われ、罪が除かれると、その結果はこのようになる。すなわち、祭壇の石はことごとく砕けた石膏のようになり、アシェラの柱や香炉台は、再び

建つことがなくなる。」(イザヤ 27:9)

また、マラキ 3 章の記述は、その時に成就する出来事を扱っていると考えられますが、頭の部分だけ引用しておきます。

「見よ、わたしは使者を送る。彼はわが前に道を備える。あなたたちが待望している主は突如、その聖所に来られる。あなたたちが喜びとしている契約の使者、見よ、彼が来る、と万軍の主は言われる。だが、彼の来る日に誰が身を支えうるか。彼の現れるとき、誰が耐えうるか。彼は精錬する者の火、洗う者の灰汁のようだ。」(マラキ 3:1, 2)

「契約の使者」は契約を結んでいる人の元に来る分けではありません。契約を結ぶことを待望している人の元へ来られるということです。

それで、「福音」についての神のご計画を簡単にまとめますと、①ユダ人に対する召し、②彼らの「過ち」により、③異邦人への招待(クリスチャン募集)、④クリスチャン定数満了、⑤再度ユダヤ人に対する救いの手だて。という計画になっています。

現代は③までの段階の途上です。今後④、⑤が成される事になります。

では実際にそれはいつなのでしょう。

それを扱う前に、先ず「全イスラエルが救われる」とはどういうことなのか。どのようにそれは成されるのかを考察しておくことにしましょう。

「全イスラエル」ということはユダヤ人なら、例外なく無条件に一人残らず救われるということでしょうか。

(一応、年の為にお断りしておきますが、今日、基本的に「ユダヤ教徒＝ユダヤ人」と言われますが、聖書預言が対象にしているのは、「先祖の故に愛されている」とあるように、「イスラエル民族」(ヤコフの子孫)のことを指します。)

彼らが無条件に救われるということは、他の聖句、また神の特質から言ってあり得ないでしょう。

この事の理解のヒントになっているのが、終末期に生じるとされている、ダニエル 11、12 章の記録にある、2種類の人々です。

「その時、あなたの国の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、

その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民で、あの書にしるされている者はすべて救われる。

地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。

思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。」(ダニエル 12:1-3)

これは、ミカエルが立ち上がり、苦難の時が生じた直後に起きますが、「書に記されている全イスラエル」が救われるということです。「地の塵の中の眠りから目覚める」というのは文字通りの死者の復活があるということではありません。

なぜそう言えるかといいますと、まず、聖書中の他の記述の中に、このタイミングで、2種類の人が、地上に復活してくるという記述はありません。

この中の「多くの者を義とする思慮深い人々」については、11章でも言及されています。

「彼は（北の王）契約を犯す者たちを巧言をもって墮落させるが、自分の神を知る人たちは、堅く立って事を行なう。民の中の思慮深い人たちは、多くの人を悟らせる。彼らは、長い間、剣にかかり、火に焼かれ、とりことなり、かすめ奪われて倒れる。彼らが倒れるとき、彼らへの助けは少ないが、多くの人、巧言を使って思慮深い人につく。思慮深い人のうちのある者は、終わりの時まで彼らを練り、清め、白くするために倒れるが、それは、定めの時はまだ来ないからである。」(ダニエル 11:32-35 新改訳)

彼らは、患難の最中、「多くの人を悟らせる」活動を行います。

この「思慮深い人たち」こそ、黙示11章に記されている「二人の証人」の一人でしょう。

それで、患難が始まると（サタンが落とされると）異邦人クリスチャンの召しは終了します。つまり、それ以降、クリスチャンが生まれることはありません。

「悟る」ように助けられたイスラエルは、「永遠の命」に導かれると約束されています。

また、この時、全地の諸国民も矯正を受けます。

「すべての王よ、今や目覚めよ。地を治める者よ、諭しを受けよ。畏れ敬って、主に仕え、おののきつつ、喜び躍れ。子に口づけせよ。主の憤りを招き、道を失うことのないように。」(詩編 2:10-12)

「子に口づけ」するように、キリストを認める「羊」は「ヤギ」から分けられます。

「さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。・・・正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。」(マタイ 25：34、46)

これらの人が導かれる「永遠の命」は、地上での命、ハルマゲドンを生き残って千年王国に導き入れられるということです。なぜなら、クリスチャンになる機会は、この時すでに終了した後だからです。諸国民が瞬時にクリスチャンになれるわけでもありません。

同様に、「永遠の命」が与えられて、救われる「全イスラエル」も、天への召しではなく、地上の復興したエルサレムの祝福された住人となるということでしょう。

さて、冒頭で、「聖書の預言を理解する上での欠かせない要素」として、この件をとりあげました。

この点が理解できると、聖書預言の雲は一気に吹っ飛び、かなり見通しが良くなるはずです。つまり、ユダヤ人たちに対して語られている言葉は、ユダヤ人に成就し、クリスチャンに対して述べられている言葉は全世界のクリスチャンに望むからです。

逆に言うと、神は決してユダヤ人を棄てられてはいないと言うことが理解できない、あるいは、何らかの事情で認めたく無い人には、決して、聖書預言を正しく理解することはできないと断言できると思います。